地域住民にとってローカルメディアは「善き隣人」なのか

――島根県浜田市・飯南町におけるインタビュー調査から―

○久野匡貴（KUNO MASAKI）、藤代裕之（HIROYUKI　FUJISHIRO）
Keywords　ジャーナリズム、地域メディア、ローカルメディア、ニューストラスト

１　目的

本研究の目的は、地域住民がローカルメディアを「善き隣人（グッドネイバー）」と捉えているかを明らかにすることである。畑中（2014）ら複数の研究者が、ローカルメディアに対し「善き隣人」という概念を用いている。グッドネイバー志向は地方局の送り手も意識しており（深澤 2019）、福岡県に本社を置く西日本新聞では地域・社会の課題解決を目指す「あなたの特命取材班」を発足させており、メディア側にも善き隣人的な取り組みを行う例がある。しかしながら、住民側の視点で、ローカルメディアの役割を捉えた研究は十分に行われていない。

２　方法

地域住民に対し半構造化インタビューを行った。対象者は、島根県浜田市と飯南町に居住する男女計 16 名である。インタビューでは、対象者のメディア接触状況を確認した上で、先行研究で示された「良き隣人」の要素を踏まえた質問を行った。具体的には「寄り添われている」「地域課題の発見」「地域課題の解決」「地域の声を代弁すること」など先行研究を参考にした 8 項目を新聞やテレビなど媒体を提示しながら、どのように関連しているかを聞いた。

３　結果

島根県本社の山陰中央新報を購読者は 8 名であった。「寄り添われている」と感じると回答した 3 名のうち購読者は 1 名であった。理由は、「地域を見てくれている感じがする」（20 代男性・学生）や「プレスリリースを送ると必ず来てくれる」（30 代男性・自営業）であった。「身近な報道しているイメージだから」「地方の問題を取り上げてくれるから」と回答したものの、新聞は読んでいない対象者が 3 名いた。山陰中央新報が「地域課題を発見している」と回答したのは 9 名で、購読または無料の電子版を見ているのは 5 名。「地域課題の解決」については、地域住民との会話の中で見つけるとの回答が 6 名、議会報で見つけるとの回答が 2 名あった。「地域課題の解決」でローカルメディアと回答したのは 1 名、5 名が「ない」、4 名が地域住民と回答した。

４　結論

調査の結果、地域住民はローカルメディアである山陰中央新報に対し「寄り添われている」や「課題発見」のイメージを持ってはいるが、実際には購読していないこともあった。地域の課題を「地域住民同士の会話」から見いだしている対象者もおり、メディアを通じて課題が発見されているわけではなかった。これから、先行研究で示されている「善き隣人」としての機能を十分に果たしていないといえる。

【主要参考文献】

畑仲哲雄、2014、『地域ジャーナリズム:コミュニティーとメディアを結びなおす』、勁草書房
深澤弘樹、2019、「インターネット時代の地域ジャーナリズム:越境する地域メディアとコミュニティーの変容」『紀要論文』駒澤大学文学部社会学科 52、1-21